女屋宮田遺跡

まちづくり交付金事業（市道 00 - 081 号線道路改良工事）に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１０．１

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

例　言

1　本報告書はまちづくり交付金事業（市道00 - 081号線道路改良工事）に伴い実施された「女屋宮田遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査の要項は次のとおりである

遺跡名	女屋宮田遺跡
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　戸塚良明
調査場所	群馬県前橋市女屋町40 − 4ほか
遺跡コード	21Ｆ9
発掘調査期間	平成21年7月24日～平成21年8月18日
整理・報告書作成期間	平成21年8月19日～平成22年1月29日
発掘・整理担当者	佐野良平（技研測量設計株式会社）

3　本書の編集は佐野が行った。原稿執筆はⅠを神宮　聡（前橋市教育委員会）、他を佐野が担当した。尚、挿図・図版を含む全ての記録をデジタル化して編集し、DTP手法を用いた組版作業を行った。作業は前田和昭（技研測量設計株式会社）が担当した。

4　発掘調査及び整理作業参加者は次のとおりである。

山田誠司　大川明子　丸山和浩　桃薗正志　（以上、技研測量設計株式会社調査員）

大川悦子　大久保柾太郎　遠藤逸子　遠藤好則　木村広美　下田順子　高山　愛　瀧澤佳子　田部井美砂子　平野ミツ子　福島禄子　本多和子　矢内司郎　矢内ヒロ子

（以上、作業員・整理補助員）

5　本調査における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。

6　下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します（敬称略）。

女屋　勇　山下工業株式会社

凡　例

1　全体図及び遺構平面図に示した方位は北に座標北を表し、グリッド座標については国家座標（日本測地系）Ⅸ系のX=41120.000・Y= − 62880.000を基点にX0・Y0の原点を設け、4ｍピッチに経線をX、緯線をYとして番付して呼称した。

2　挿図は国土地理院発行1/25,000『前橋』『大胡』、前橋市発行1/2,500都市計画図を使用した。

3　土層の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）に基づいている。

4　各挿図の縮尺は、それぞれに付してある。

5　遺構名称は、竪穴住居：H、溝：W、土坑：D、ピット：Pである。

6　表中の計測値については（　）は現存値を表す。

目　次

調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
調査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
写真図版
抄録

Ⅰ　調査に至る経緯

本発掘調査は、まちづくり交付金事業（市道 00 － 081 号線道路改良工事）に伴い平成 21 年 6 月 2 日に実施した試掘調査結果を踏まえ、平成 21 年 6 月 8 日付けで前橋市長 高木政夫（道路建設課）より埋蔵文化財発掘調査の依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受けた前橋市教育委員会より、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 戸塚良明 (以下「調査団」という。) に発掘調査実施について協議があった。しかし、調査団では既に市内数ヶ所において直営による発掘調査を実施しており、調査団直営による調査の実施が困難であるため、民間調査組織に業務を委託したいとの回答をした。民間調査組織の導入については、依頼者である前橋市の合意も得られ、7 月 17 日付けで前橋市と調査団との間で発掘調査業務契約を締結し、その後、7 月 22 日付けで調査団と民間調査組織である技研測量設計株式会社 代表取締役社長 嶋田大和との間で発掘調査業務契約を締結し、発掘調査開始に至る。

Ⅱ　調査の方法と経過

調査方法は調査区内に排土置き場設置の関係上、調査区を北・南に二分割し北側調査区から調査を開始、調査終了後北側調査区を埋め戻し､南側調査区の調査を開始した。表土掘削は試掘調査の結果をふまえ遺構確認面まで重機 (0.45 ユンボ) で掘削、遺構調査に関しては土層観察用ベルトを適宜設定し埋土の堆積状況・遺物出土状況に留意しながら行った。遺構図化については電子平板を用いて平面図・断面図の測量・編集、一部断面は画像からオルソーフォトに変換して編集を行った。遺構の写真記録は 35mm カラーフィルム･リバーサルフィルム･デジタルカメラの３種類を使用し担当者が撮影した。

調査の経過概要（平成 21 年 7 月 24 日～平成 21 年 8 月 18 日）

調査は対象地域を南北二分し、前半に北半部、後半に南半部の遺構調査を実施した。

7 月24日　調査区設定。
7 月27日　重機（0.45ユンボ）、ユニットハウス、仮設トイレ搬入。表土掘削開始。
7 月28日　遺構確認調査開始。器材搬入。
7 月29日　遺構掘削開始。
8 月 3 日　調査区北半部全景撮影。遺構測量。
8 月 4 日　調査区北半部埋め戻し。南半部表土掘削開始。
8 月 5 日　遺構確認調査開始。
8 月 6 日　遺構掘削開始。
8 月12日　調査区南半部全景撮影。遺構測量。
8 月17日　調査区南半部埋め戻し。仮設トイレ・器材搬出。
8 月18日　重機・ユニットハウス搬出。

Ⅲ　基本層序

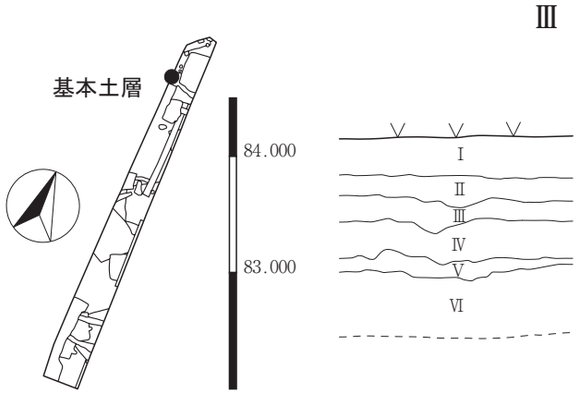


Fig. 1　基本層序

本遺跡の層序は上面からの撹乱の影響が少ない調査区北西壁を基本土層として観察した。本遺跡が広瀬川低地帯内等の立地条件から、流水によって砂質の黒色土と黄褐色土が交互に堆積していることが確認できる。またⅥ層下では礫層が確認されるため旧河川の河床の可能性が考えられる。

基本土層
Ⅰ　現耕作土
Ⅱ　黒褐色土　(10YR3/1)　黄褐色砂質土ブロックを少量含む。締まり弱い。粘性やや弱い。
Ⅲ　にぶい黄褐色土　(10YR4/3)　黄褐色砂質土主体。締まり弱い。粘性やや弱い。
Ⅳ　黒褐色土　(10YR2/2)　黒色粘質土主体。砂質土を少量含む。締まりやや有り。粘性やや強い。
Ⅴ　灰黄褐色土　(10YR4/2)　灰黄褐色砂質土主体。締まり弱い、粘性やや弱い。
Ⅵ　褐灰色土　(10YR5/1)　砂層。下部に小礫を伴う。締まり弱い、粘性弱い。

Ⅳ　立地と環境

女屋宮田遺跡は前橋市街地から東へ約 7 km の旧木瀬村女屋町内に位置する。本遺跡は約 24,000 年前の浅間山噴火を起因とする火山泥流堆積物で形成された前橋台地と赤城山南麓の間を約 3km 幅で広がる旧利根川流路である広瀬川低地帯に立地する。広瀬川低地帯内は桃木川・広瀬川などの中小河川が網目状に流下している。桃木川は本遺跡南西で赤城山麓から流下する寺沢川と合流し南東流する。河川によって形成された微高地上には集落遺跡が、後背湿地には生産適地が存在している。現在、木瀬地区は旧利根川河床の水はけの良い土壌を利用して梨の生産地として発展している。広瀬川低地帯

は従来大規模開発が少ない事もあり確認された遺跡が少なく、むしろ一般国道17号（上武国道）改築工事や圃場整備に伴う発掘調査が多い赤城山南麓に多く分布する傾向であったが、近年学校施設や市道改良工事に伴う発掘調査によって調査事例が増加の傾向にある。本遺跡周辺地域のおける時代ごとの遺跡概要は以下の通りである。

女屋宮田遺跡周辺における旧石器時代の遺跡は希薄であり、赤城山麓を南流する荒砥川以東に多少分布する。縄文時代になると今井白山遺跡（４）では中期の敷石住居・土坑、笂井八日市遺跡（３）では後期の土坑、小島田八日市遺跡（11）では草創期のピットが確認されている。弥生時代の遺跡は荒砥川流域の東岸に多く、荒砥川以西では稀有である。今井白山遺跡（４）では後期の土坑が確認されている。古墳時代になると過疎地ともいえた平野部に新たな開発を求めて低地周辺の微高地に集落を移し始める。遺跡数も前時代と比べて増加する。野中天神遺跡（２）では後期の竪穴住居跡、笂井八日市遺跡（３）では５世紀後半～６世紀初頭築造の古墳、豪族居館の可能性がある一辺約160ｍの方形区画遺構、中期の竪穴住居跡、今井白山遺跡（４）では前期～後期の竪穴住居跡、石関西簗瀬遺跡（６）では中・後期の竪穴住居跡、笂井中屋敷遺跡（12）では後期の竪穴住居跡が確認されている。古墳は荒砥川流域、二之宮町、西大室町周辺の荒砥古墳群や広瀬川西岸の広瀬古墳群といった広瀬川低地帯の両岸に多く築造される。本遺跡東側で南流する寺沢川東岸の微高地上にも古墳多く存在する。５～６世紀のものが主体で、そのほとんどは土地改良などにより削平されており、石室の一部や埴輪が散在している。その他の古墳時代の遺跡として棗遺跡（８）がある。奈良･平安時代の遺跡として野中天神遺跡（２）、石関西田Ⅱ遺跡（５）、石関西簗瀬遺跡（６）、伊勢遺跡（９）、宮田遺跡（10）、笂井中屋敷遺跡（12）で竪穴住居跡が確認されている。また野中天神遺跡（２）、笂井八日市遺跡（３）、石関西田Ⅱ遺跡（５）ではAs-B下水田跡を検出している。中世以降の遺構では、野中天神遺跡（２）では屋敷跡、西片貝源田島遺跡（７）では火葬墓、中世城館の下長磯城（13）、中世初期の用水路である女掘（14）などがある。

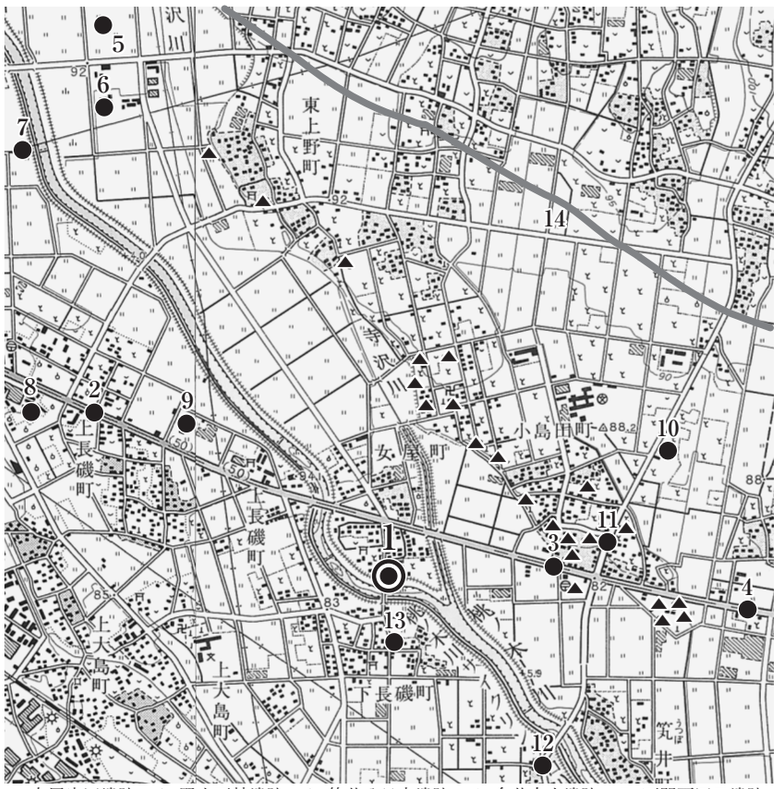


Fig.２　周辺遺跡（Ｓ＝1/25,000）

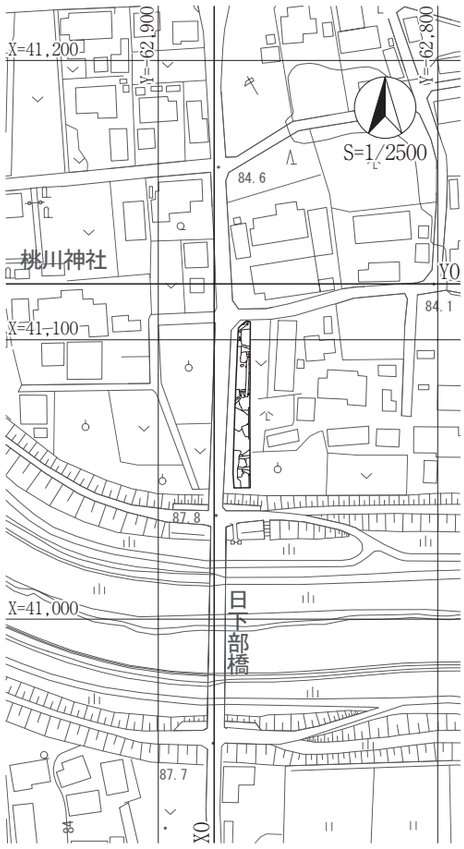


Fig.３　女屋宮田遺跡位置図

H－1（Fig. 6・10、PL 2・5）

位置　X 2、Y 3・4 グリッド　主軸方向　N－51°－E　規模　長軸 4.54 m、短軸（1.16）m、壁現高 27cm。面積　（4.66）㎡　床面　平坦ではあるが硬化面はない。　出土遺物　土師器高坏・坏・甕。　時期　出土遺物が少量であるため判断し難いが４～５世紀代と考えられる。

H－2（Fig. 6・10、PL 2・5）

位置　X 2・3、Y 4～6 グリッド　主軸方向　N－0°－E　規模　東西(3.36)m、南北8.2 m、壁現高29cm。　面積　（26.10）㎡　床面　部分的に硬化面がみられるが全体的には硬化が弱い。　重複　W－1、P－4と重複しており、新旧関係は本遺構→W－1→P－4である。　出土遺物　赤井戸式土器、土師器高坏・坏・壷・台付甕。　時期　出土遺物から４世紀代と考えられる。

H－3（Fig. 6、PL 2）

位置　X 3・4、Y 7 グリッド　主軸方向　N－60°－E　規模　長軸 (3.2 m、) 短軸 (1.96) m、壁現高 24cm。　面積　（3.30）㎡　床面　平坦で部分的に硬化。　出土遺物　土師器坏・壷。　時期　出土遺物が少量であるため判断し難いが５世紀代と考えられる。

H－4（Fig. 6・10・11、PL 2・5）

位置　X 2・3、Y 9～11 グリッド　主軸方向　N－19°－W　規模　長軸7.04 m、短軸(5.28)m、壁現高34cm。面積　（24.50）㎡　床面　平坦でほぼ全体的に硬化。　重複　W－3と重複しており、新旧関係は本遺構→W－3である。　竈　灰・炭化物の集中から北壁中央部にあったと考えられる。　出土遺物　土師器高坏・坏・壷・甕、コモ石。　時期　出土遺物から５世紀第４四半期と考えられる。

H－5（Fig. 6、PL 2）

位置　X 2・3、Y 12・13 グリッド　主軸方向　N－68°－E　規模　長軸 4.2 m、短軸（2.9）m、壁現高 20cm。面積　(8.15) ㎡　床面　平坦で中央部硬化。　重複　H－6と重複しており、新旧関係はH－6→本遺構である。　出土遺物　土師器小片、コモ石。　時期　出土遺物からは判断し難い。H－6との新旧関係から５世紀以降と考えられる。

H－6（Fig. 7・11、PL 3・6）

位置　X 1～3、Y 11～13 グリッド　主軸方向　N－35°－E　規模　長軸 7.08 m、短軸（7.0）m、壁現高 15cm。面積　（30.60）㎡　床面　平坦ではあるが硬化面はない。　重複　H－5と重複しており、新旧関係は本遺構→H－5である。　竈　調査区際の北東壁東側よりに位置。残存状況は不良であり袖は確認できず、前面に灰・炭化物の集中が見られるのみである。　出土遺物　土師器高坏・坏・壷・甕、コモ石。　時期　出土遺物から５世紀第３四半期と考えられる。

H－7（Fig. 7・12、PL 3・6）

位置　X 2、Y 15･16 グリッド　主軸方向　N－61°－E　規模　短軸 4.54 m、長軸（3.1）m、壁現高 20cm。　面積　（9.50）㎡　床面　平坦ではあるが硬化面はない。　重複　H－8・9、W－4・5と重複しており、新旧関係はH－9→本遺構・H－8→W－4・5である。　出土遺物　土師器坏・甕　時期　出土遺物から８世紀代と考えられる。

H－8（Fig. 7・8、PL 4・6）

位置　X 2、Y 16・17 グリッド　主軸方向　N－89°―E　規模　長軸（3.2）m、短軸（1.68）m、壁現高 16cm。

面積　(5.10) ㎡　床面　平坦ではあるが硬化面はない。　重複　Ｈ－７・10、Ｗ－５と重複しており、新旧関係はＨ－10→本遺構・Ｈ－７→Ｗ－５である。　出土遺物　土師器坏・甕　時期　出土遺物から８世紀代と考えられる。

Ｈ－９（Fig. ８、PL ４）

位置　Ｘ１・２、Ｙ13～15グリッド　主軸方向　Ｎ－52°－Ｅ　規模　長軸5.78ｍ、短軸(5.14)ｍ、壁現高９cm。面積　(23.10)㎡　床面　上層により削平されている。　重複　Ｈ－７と重複しており、新旧関係は本遺構→Ｈ－７である。　出土遺物　土師器坏・甕　時期　出土遺物からは判断し難い。Ｈ－７との新旧関係から古墳時代と考えられる。

Ｈ－10（Fig. ８、PL ４）

位置　Ｘ２・３、Ｙ16･17グリッド　主軸方向　Ｎ－28°－Ｅ　規模　長軸(5.8)ｍ、短軸(5.8)ｍ、壁現高９cm。面積　(16.50)㎡　床面　平坦ではあるが硬化面はない。　重複　Ｈ－８、Ｐ－５と重複しており、新旧関係は本遺構→Ｈ－８→Ｐ－５である。　出土遺物　土師器高坏・坏。　時期　Ｈ－８との新旧関係から古墳時代に帰属すると考えられる。

Ｗ－１（Fig. ８、PL ２）

位置　Ｘ２・３、Ｙ５グリッド　主軸方向　Ｎ－102°－Ｅ　長さ　(4.6) ｍ　最大幅　上幅2.24ｍ、下幅0.62ｍ。　深さ　0.26ｍ　形状　逆台形。　重複　Ｈ－２、Ｐ－４と重複しており、新旧関係はＨ－２→本遺構→Ｐ－４である。　出土遺物　土師器小片。　時期　覆土の状況から中世以降と考えられる。　備考　通水の痕跡は認められない。

Ｗ－２（Fig. ８、PL ４）

位置　Ｘ２・３、Ｙ６グリッド　主軸方向　Ｎ－89°－Ｅ　長さ　(1.2) ｍ　最大幅　上幅0.92ｍ、下幅0.51ｍ。　深さ　0.42ｍ　形状　逆台形。　出土遺物　土師器小片。　時期　覆土の状況から中世以降と考えられる。　備考　通水の痕跡は認められない。

Ｗ－３（Fig. ８、PL ４）

位置　Ｘ２、Ｙ９グリッド　主軸方向　Ｎ－80°－Ｅ　長さ　(2.18) ｍ　最大幅　上幅0.58ｍ、下幅0.46ｍ。　深さ　0.12ｍ　形状　逆台形。　重複　Ｈ－４と重複しており、新旧関係はＨ－４→本遺構である。　出土遺物　内耳鍋　時期　出土遺物・覆土の状況から中世以降と考えられる。　備考　通水の痕跡は認められない。

Ｗ－４（Fig. ９、PL ４）

位置　Ｘ２・３、Ｙ15グリッド　主軸方向　Ｎ－82°－Ｅ　長さ　(４) ｍ　最大幅　上幅0.98ｍ、下幅0.65ｍ。　深さ　0.27ｍ　形状　Ｕ字形。　重複　Ｈ－７と重複しており、新旧関係はＨ－７→本遺構である。　出土遺物　土師器小片。　時期　覆土の状況から中世以降と考えられる。　備考　通水の痕跡は認められない。

Ｗ－５（Fig. ９、PL ４）

位置　Ｘ２・３、Ｙ16グリッド　主軸方向　Ｎ－94°－Ｅ　長さ　(4.32) ｍ　最大幅　上幅1.36ｍ、下幅0.58ｍ。深さ　0.22ｍ　形状　逆台形。　重複　Ｈ－７･８と重複しており、新旧関係はＨ－７･８→本遺構である。　出土遺物土師器小片。　時期　覆土の状況から中世以降と考えられる。　備考　通水の痕跡は認められない。

Tab. 1　土坑・ピット計測表

遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	形状	出土遺物	備考
Ｄ－１	Ｘ２、Ｙ７	1.23	0.78	0.26	楕円形	土師器甕、砥石	
Ｐ－１	Ｘ２、Ｙ３	0.55	0.50	0.71	楕円形	陶器	
Ｐ－２	Ｘ２、Ｙ４	0.49	0.44	0.37	楕円形	土師器	
Ｐ－３	Ｘ２、Ｙ４	0.37	0.31	0.22	楕円形	土師器	
Ｐ－４	Ｘ３、Ｙ５	－	－	0.44	－	五輪塔（空風輪）	調査区東壁で確認
Ｐ－５	Ｘ３、Ｙ17	0.48	(0.33)	0.60	楕円形		

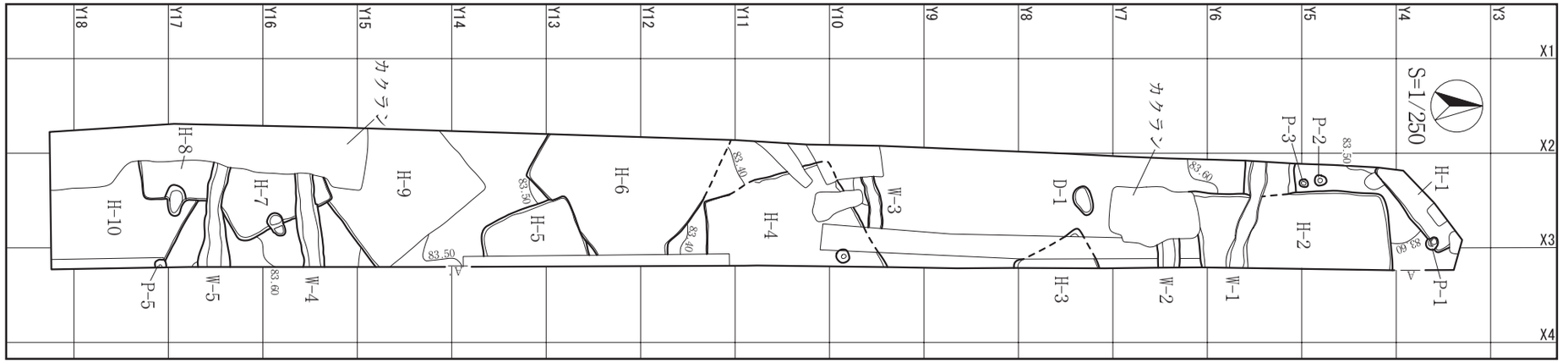


Fig.4　女屋宮田遺跡　全体図

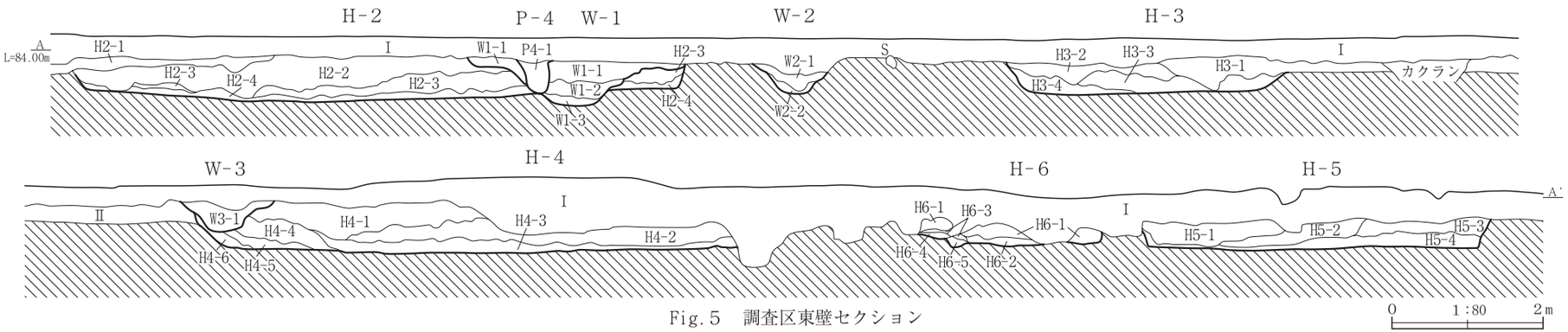


Fig.5　調査区東壁セクション

H-1～5、W-1～3、P-4　SPA

H2-1. 暗褐色土（10YR3/3）暗褐色土主体。砂質土。締まり有り、粘性弱い。
H2-2. 暗褐色土（10YR3/4）褐色軽石を少量含む。締まり有り、粘性やや強い。
H2-3. 暗褐色土（10YR3/3）褐色軽石を少量含む。締まり有り、粘性やや強い。
H2-4. 暗褐色土（10YR3/3）炭化物を微量含む。締まり有り、粘性やや強い。

H3-1. 黒褐色土（10YR3/2）炭化物を少量含む。砂質土。締まり有り。粘性やや弱い。
H3-2. 黒褐色土（10YR3/2）H3-1層と比べ炭化物少ない。砂質土。締まり有り。粘性やや弱い。
H3-3. 暗褐色土（10YR3/3）炭化物を微量含む。やや砂質土。締まり有り、粘性やや強い。
H3-4. 暗褐色土（10YR3/3）灰黄褐色砂質土ブロックを少量含む。締まり有り、粘性やや強い。

H4-1. 黒褐色土（10YR3/2）灰黄褐色砂質土を少量含む。締まり有り、粘性強い。
H4-2. 暗褐色土（10YR3/4）焼土粒を微量含む。締まり有り、粘性強い。
H4-3. 暗褐色土（10YR3/4）土器小片、炭化物、焼土粒を微量含む。締まり有り、粘性強い。
H4-4. 暗褐色土（10YR3/4）土器小片を小量含む。締まり有り、粘性強い。
H4-5. 暗褐色土（10YR3/4）炭化物を中量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
H4-6. 暗褐色土（10YR3/4）灰黄褐色砂質土含む。砂質土。締まりやや弱い、粘性やや弱い。

H5-1. 暗褐色土（10YR3/3）暗褐色土主体。焼土粒、炭化物を少量含む。締まり有り、粘性やや弱い。
H5-2. 黒褐色土（10YR3/1）灰、炭化物主体。焼土粒を少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
H5-3. 暗褐色土（10YR3/3）暗褐色土主体。焼土粒を微量含む。締まり有り、粘性やや弱い。
H5-4. 暗褐色土（10YR3/3）暗褐色土主体。土器小片を含む。締まり有り、粘性強い。

H6-1. 暗褐色土（10YR3/3）暗褐色土主体。締まり有り、粘性やや弱い。
H6-2. 暗褐色土（10YR3/3）暗褐色土主体。焼土粒、炭化物を微量含む。締まり有り、粘性やや弱い。
H6-3. 明赤褐色土（2.5YR5/8）焼土ブロック主体。竈天井崩落土か。締まり有り、粘性やや弱い。
H6-4. 黒褐色土（10YR3/1）灰、炭化物主体。焼土粒を少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
H6-5. 暗褐色土（10YR3/3）暗褐色土主体。焼土粒、炭化物を微量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。

W1-1. 暗褐色土（10YR3/4）暗褐色土主体。褐色軽石を少量含む。締まり有り、粘性やや強い。
W1-2. 暗褐色土（10YR3/4）暗褐色土主体。褐色軽石を微量含む。締まり有り、粘性やや強い。
W1-3. にぶい黄褐色土（10YR4/3）暗褐色土主体。灰黄褐色砂質土を少量含む。締まり有り、粘性やや強い。

W2-1. 黒褐色土（10YR3/2）黄褐色砂質土ブロックを少量、炭化物を微量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。
W2-2. にぶい黄褐色土（10YR4/3）黄褐色砂質土ブロックを少量含む。締まりやや弱い、粘性やや弱い。

W3-1. 黒褐色土（10YR3/1）黒褐色土主体。灰黄褐色砂質土を含む。締まり有り、粘性やや強い。

P4-1. 暗褐色土（10YR3/3）暗褐色土主体。砂質土。締まり有り、粘性弱い。

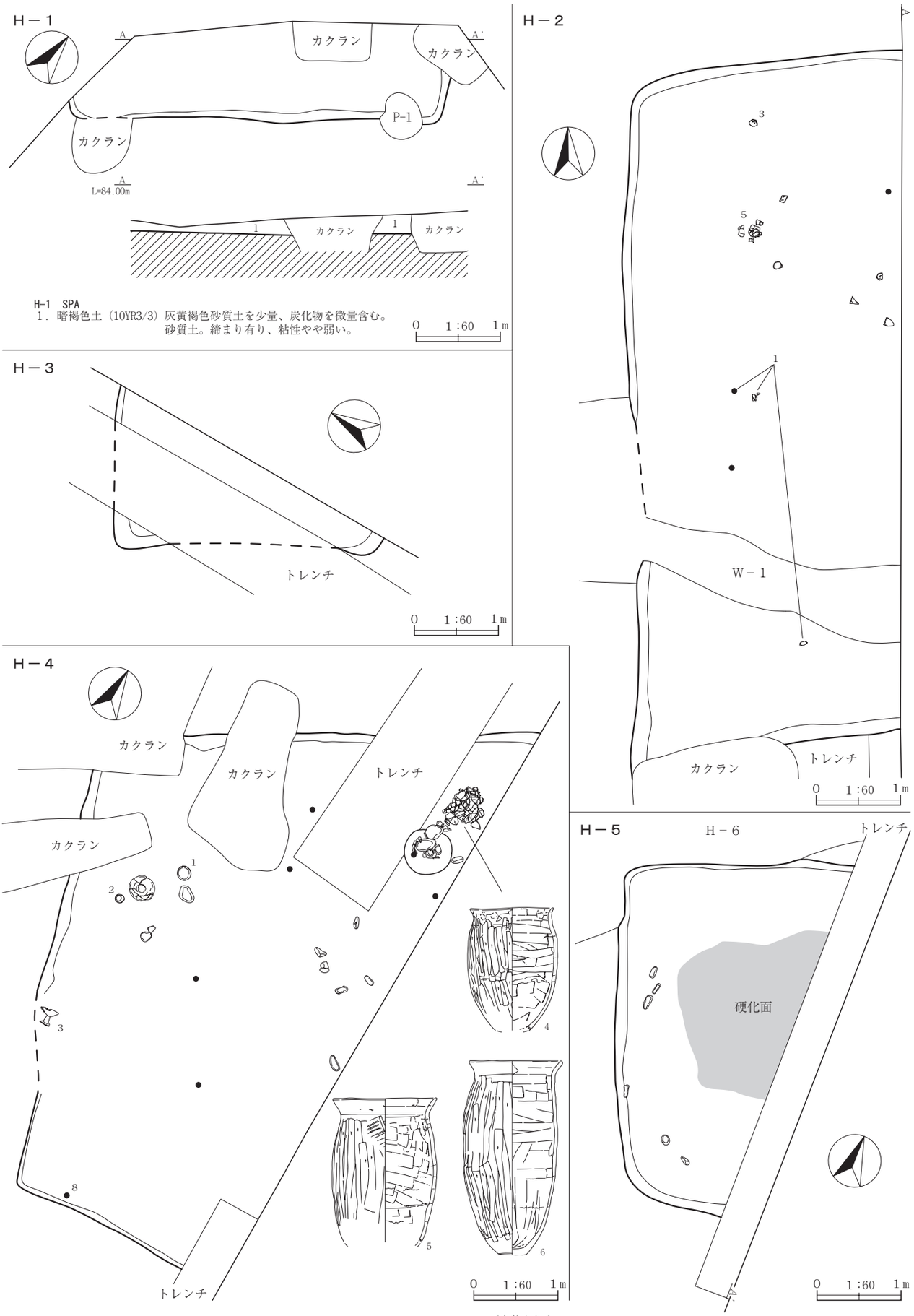
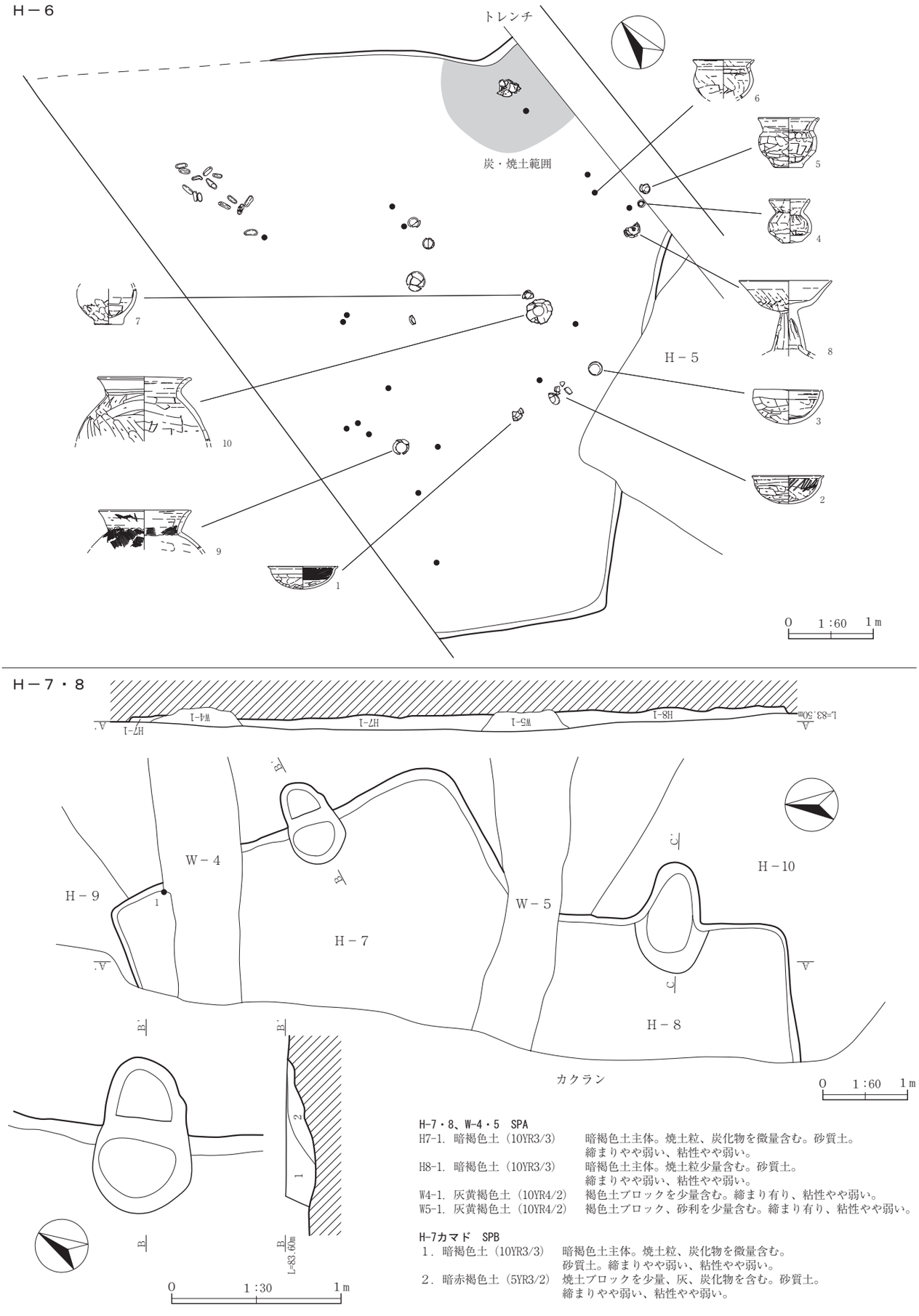


Fig.6　H－1～5号住居跡



H-7・8、W-4・5 SPA

H7-1. 暗褐色土（10YR3/3） 暗褐色土主体。焼土粒、炭化物を微量含む。砂質土。締まりやや弱い、粘性やや弱い。

H8-1. 暗褐色土（10YR3/3） 暗褐色土主体。焼土粒少量含む。砂質土。締まりやや弱い、粘性やや弱い。

W4-1. 灰黄褐色土（10YR4/2） 褐色土ブロックを少量含む。締まり有り、粘性やや弱い。

W5-1. 灰黄褐色土（10YR4/2） 褐色土ブロック、砂利を少量含む。締まり有り、粘性やや弱い。

H-7カマド SPB

1．暗褐色土（10YR3/3） 暗褐色土主体。焼土粒、炭化物を微量含む。砂質土。締まりやや弱い、粘性やや弱い。

2．暗赤褐色土（5YR3/2） 焼土ブロックを少量、灰、炭化物を含む。砂質土。締まりやや弱い、粘性やや弱い。

Fig.7 Ｈ－６～８号住居跡

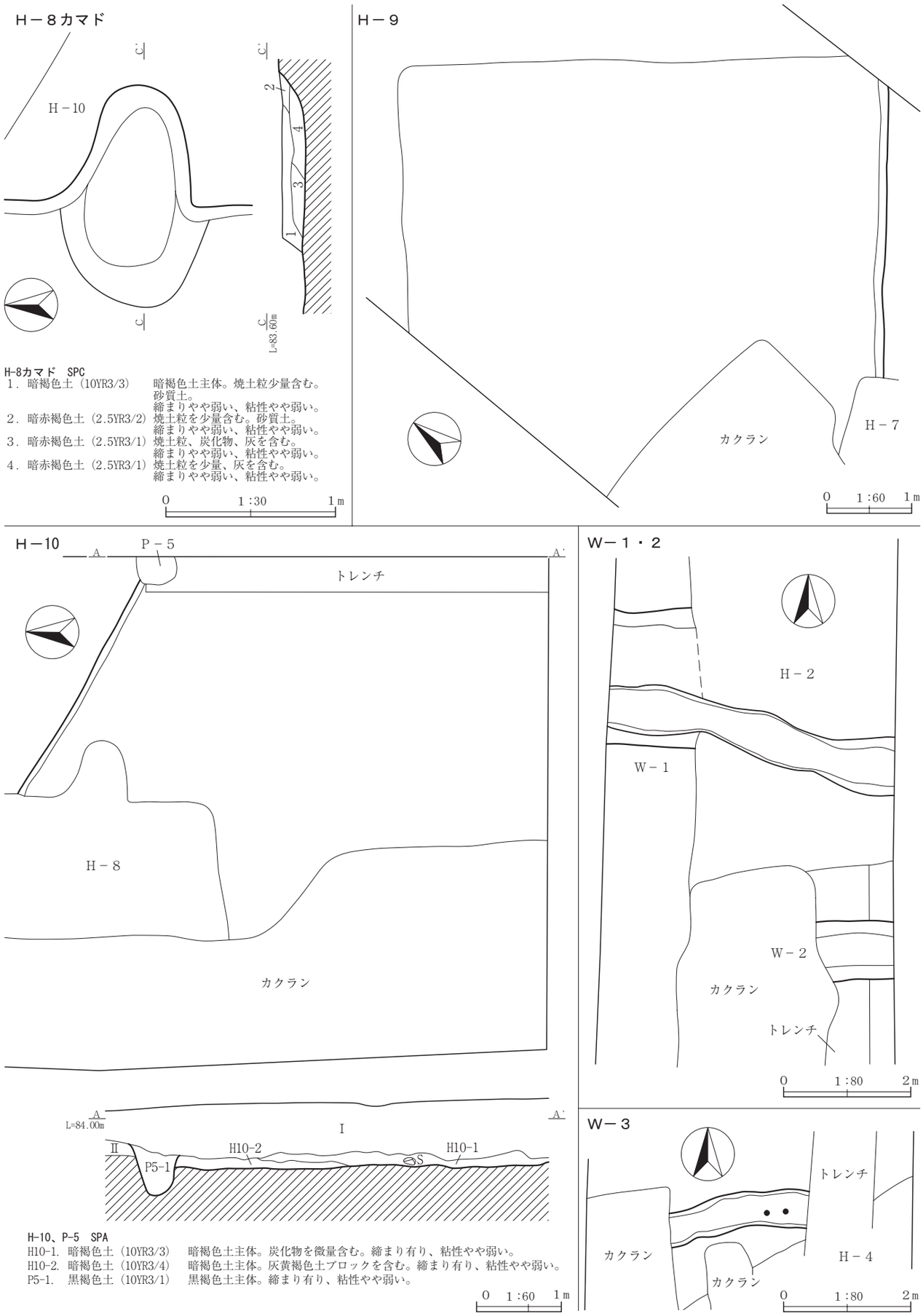


Fig.８　Ｈ－８号住居跡カマド、Ｈ－９・10号住居跡、Ｗ－１～３号溝

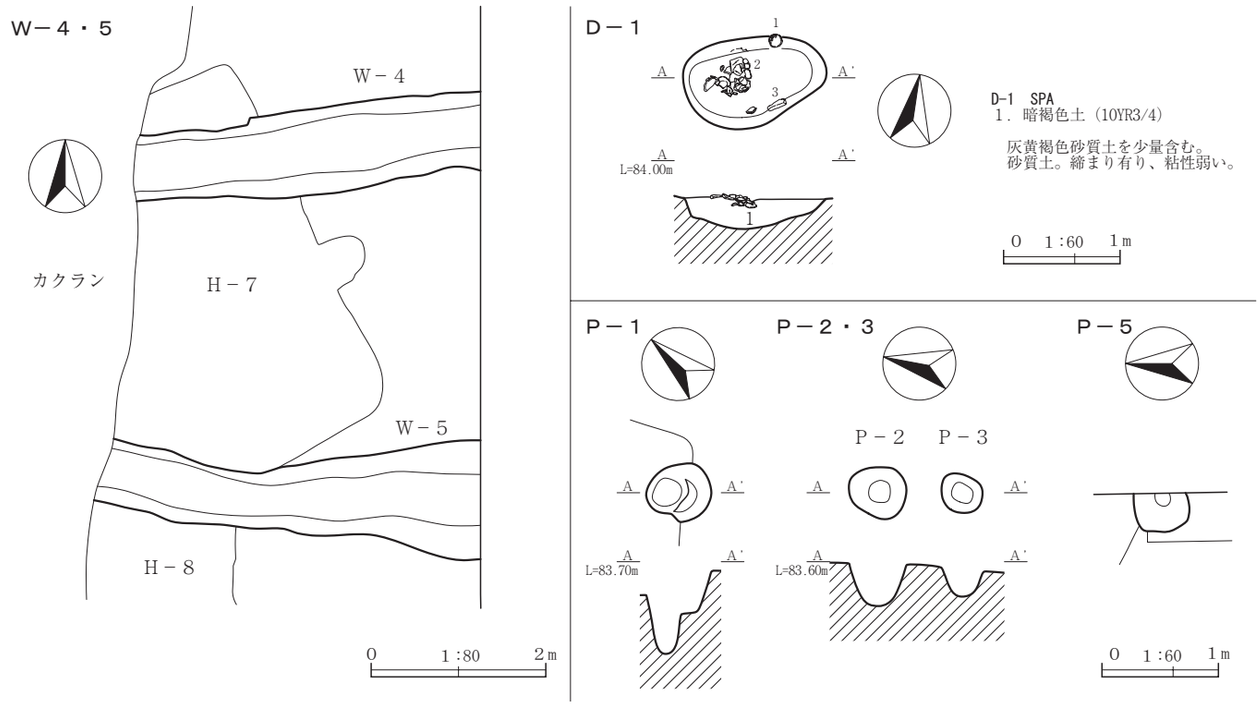


Fig.9　W－4・5号溝、D－1号土坑、P－1～3・5号ピット

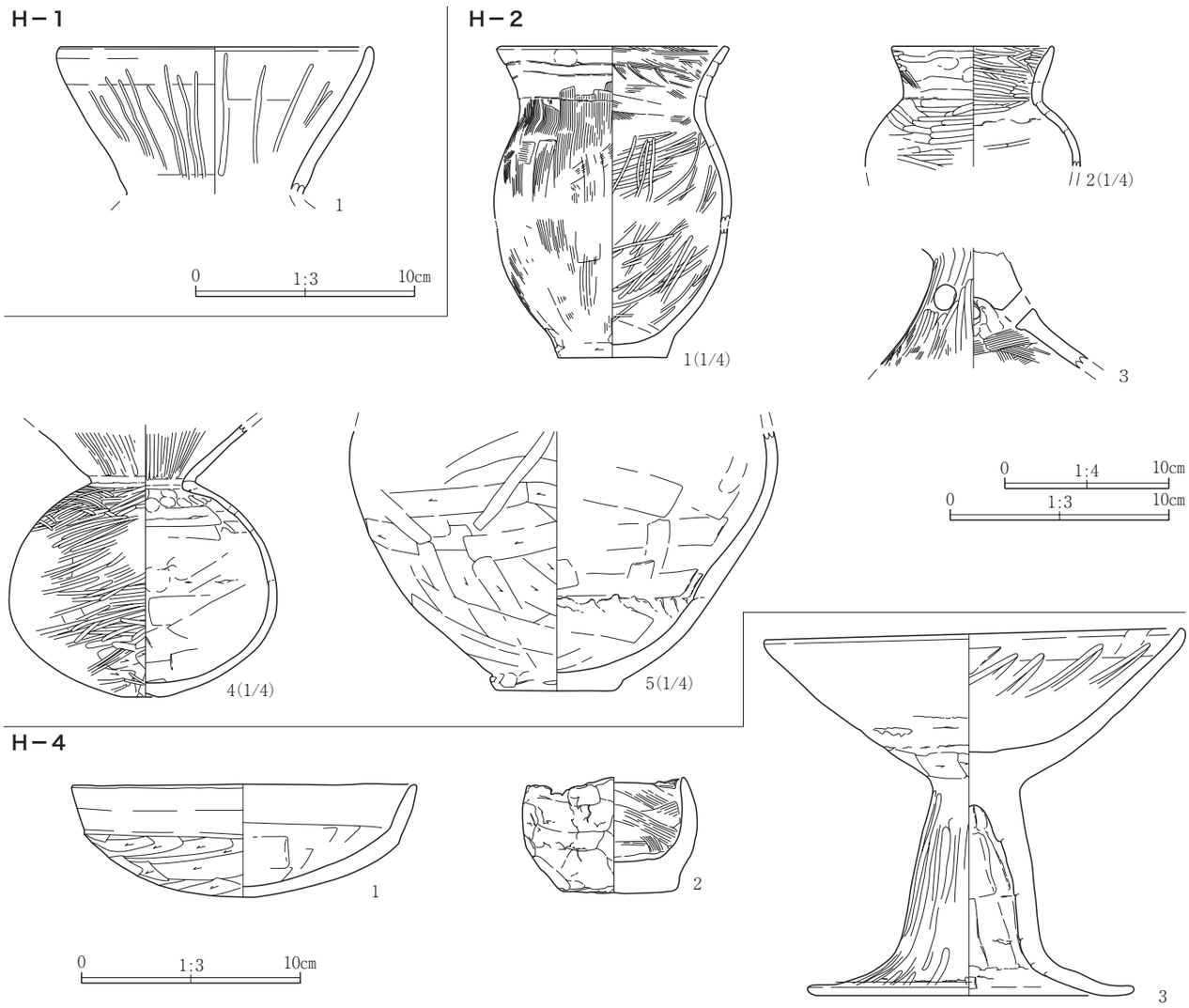
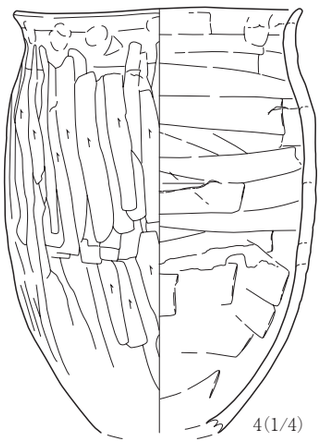
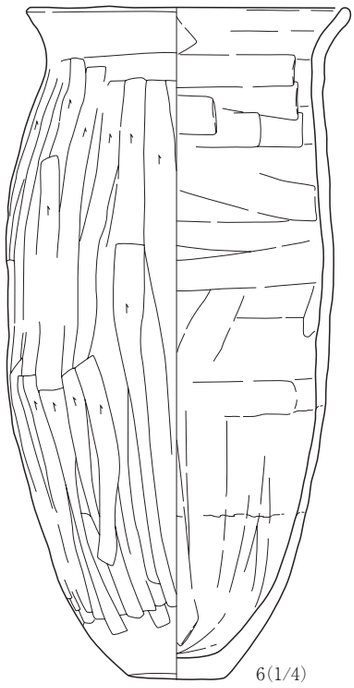
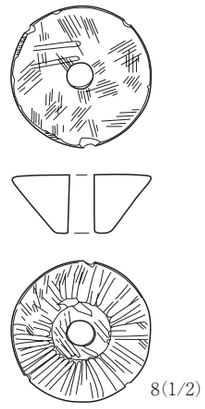


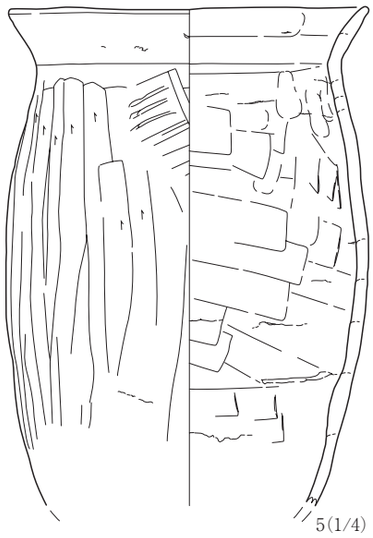
Fig.10　H－1・2・4号住居跡出土遺物


4(1/4)


6(1/4)

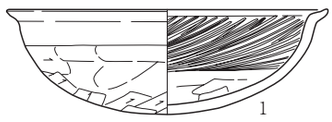
7(1/2)

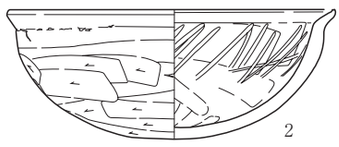

8(1/2)

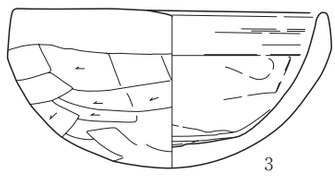

5(1/4)

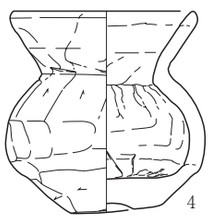
0 1:2 5cm
0 1:4 10cm

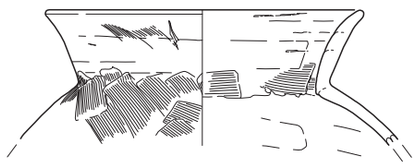
H－6

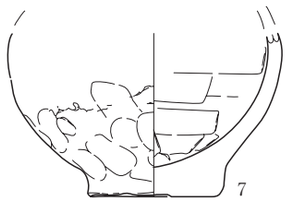

1

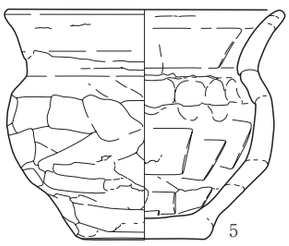

2

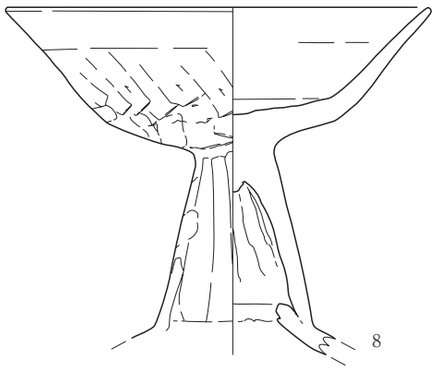

3

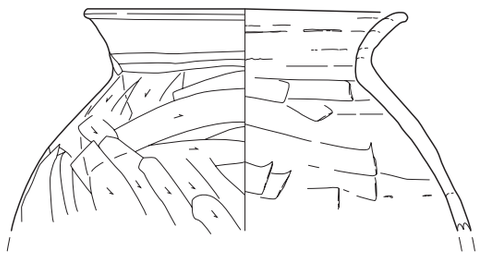

4

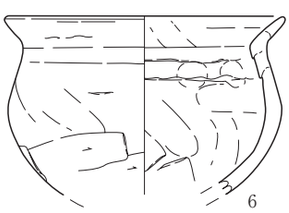

9(1/4)


7


5


8


10(1/4)


6

0 1:4 10cm
0 1:3 10cm

Fig.11　H－4・6号住居跡出土遺物

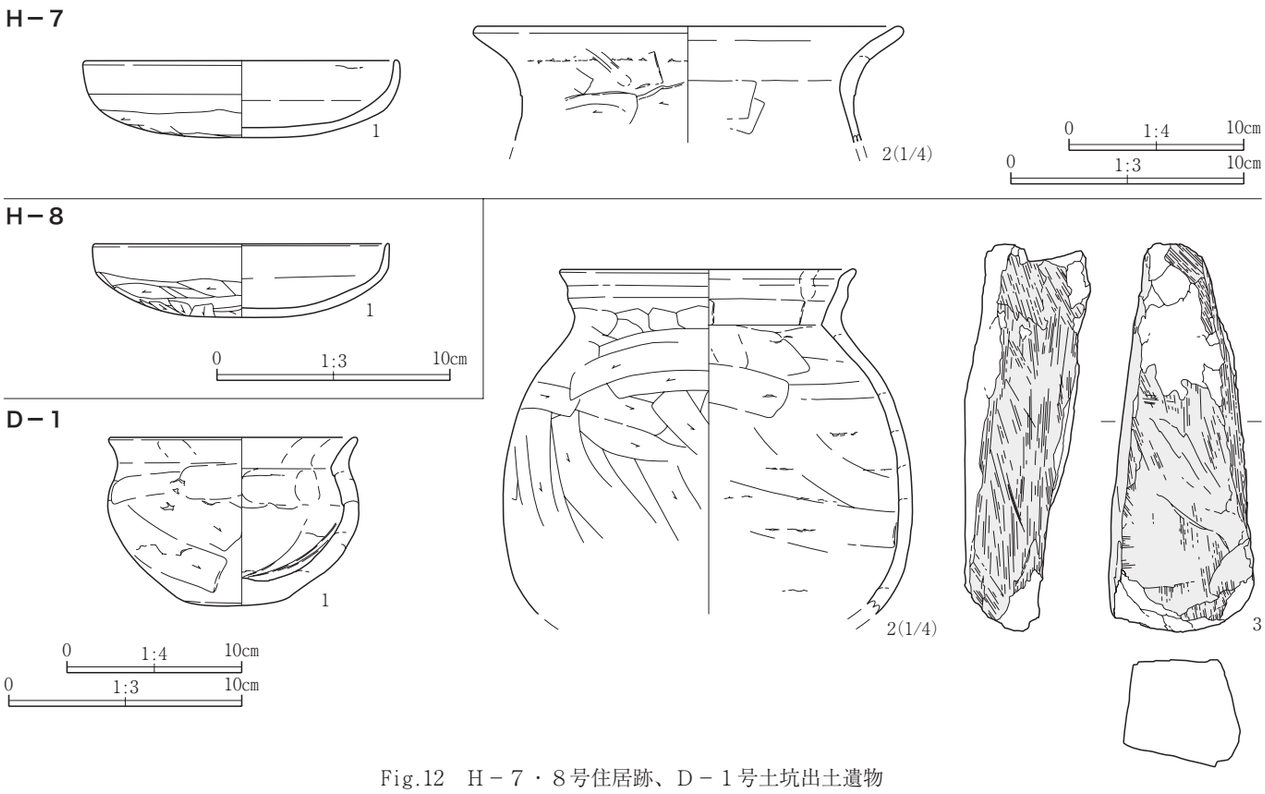


Fig.12　H－７・８号住居跡、D－１号土坑出土遺物

発掘調査風景

D－１調査風景

発掘調査風景

Tab. 2　出土遺物観察表

H-1

番号	出土位置	種別、器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土師器　壷	(14. 2)	–	(6. 7)	白・黒・赤色粒、黒雲母	良好	褐色 黒色	内外面ヨコナデ後縦位ミガキ。	口縁部片残存。

H-2

番号	出土位置	種別、器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	床面直上	土師器　甕	(14. 2)	–	(19. 0)	白・黒色粒、黒雲母	やや軟質	灰黄褐色 黒褐色 にぶい黄橙色	外面口縁部ヨコナデ、以下ハケケズリ及びハケナデ。底部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ後斜位及び横位ハケナデ。頸部以下ヘラナデ後ミガキ。	1/3残存。
2	覆土	土師器　小型甕	9. 7	–	(7. 3)	黒色粒、チャート、石英、小礫	良好	浅黄色 黒色	外面口縁部ユビナデ後横位ミガキ、以下斜位及び横位ミガキ。内面口縁部ユビナデ後横位及び斜位ミガキ、胴部ヘラナデ後ミガキ。	口縁～胴部中位残存。
3	床面直上	土師器　器台	–	–	(5. 6)	黒色粒、黒雲母	良好	橙色	外面ヘラケズリ後ハケナデ後縦位ミガキ。 内面ユビナデ後ハケナデ。	脚部片残存。 透し孔３方。
4	覆土	土師器　坩	–	(2. 3)	(16. 6)	白・黒色粒、黒雲母	良好	明赤褐色	外面口縁部縦位ミガキ、頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後斜位・横位ミガキ。底部ヘラケズリ後ミガキ。内面口縁部縦位ミガキ、頸部ヨコナデ、肩部ユビオサエ、以下ヘラナデ。	1/4残存。
5	床面直上	土師器　壷	–	7. 3	(15. 8)	黒色粒、黒雲母	良好	橙色	外面ヘラケズリ。 内面ヘラナデ及びユビナデ。	胴部下位～底部残存。

H-4

番号	出土位置	種別、器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	床面直上	土師器　坏	15. 5	–	5. 3	黒・赤色粒、黒雲母、石英、チャート	良好	橙色 黒褐色	外面口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ。	完存。
2	床面直上	土師器　手捏ね	(7. 2)	5. 1	5. 3	白・黒・赤色粒、黒雲母、小礫	良好	灰黄褐色	外面手捏ね。底部ユビナデ。 内面ハケナデ及びユビナデ。	4/5残存。
3	床面直上	土師器　高坏	19. 2	(14. 9)	16. 7	白・黒・赤色粒、黒雲母、石英	良好	橙色	外面坏部ヘラケズリ後ユビナデ。脚部ヘラナデ後ユビナデ後ミガキ。内面坏部ヘラナデ後ユビナデ後ミガキ。脚部ヘラナデ及びユビナデ。	口縁部・裾部欠損。 坏部内面剥落。
4	床面直上	土師器　甕	16. 3	–	(24. 3)	灰・黒色粒、水晶、小礫	良好	赤褐色	外面口縁部ヨコナデ及びユビオサエ、以下細い縦位ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ。	胴部下半1/3と底部残存。
5	床面直上	土師器　甕	20. 5	–	(28. 6)	白・黒・橙色粒、黒雲母	良好	にぶい黄橙色	外面口縁部ヨコナデ以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ及びユビナデ。	胴部下部～底部欠損。 カマド粘土付着。
6	床面直上	土師器　長胴甕	18. 3	5. 4	38. 6	白・黒色粒、水晶、チャート	良好	にぶい黄橙色 赤褐色	外面口縁部ヨコナデ、以下縦位ヘラケズリ、下部ユビナデ。底部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、以下胴中位横位ヘラナデ、下半部縦位ヘラナデ。	5/6残存。 カマド粘土付着。

番号	出土位置	種別、器種	長さ (cm)	最大径 (cm)	胎土	焼成	色調	重さ（g）	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
7	覆土	土製品　土錘	6. 9	1. 9	白・黒・赤色粒	良好	黒褐色	20. 2	ユビナデ。孔径0. 5～0. 6cm。	完存。 上半（炭化？）煤付着。

番号	出土位置	種別、器種	直径 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)	石質	焼成	色調	重さ（g）	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
8	床面直上	石製品 紡錘車	4. 0	0. 7	1. 7	砂岩	–	–	30. 8	全面研磨。側面上端部にわずかな鏑。下面放射状研磨。	ほぼ完存。

H-6

番号	出土位置	種別、器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	床面直上	土師器　坏	13. 9	–	4. 5	白・黒・赤色粒、黒雲母	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ及びユビナデ。内面口縁部ヨコナデ、以下体部ヘラナデ後ミガキ。底部ヘラナデ。	一部欠損。
2	床面直上	土師器　坏	14. 0	–	5. 6	白・黒・赤色粒	良好	明赤褐色	外面口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ後ミガキ。底部ヘラナデ後ユビナデ。	ほぼ完存。
3	床面直上	土師器　坏	13. 2	–	6. 5	白・赤色粒、石英、黒雲母	良好	灰黄褐色	外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ。 内面ヘラナデ後ユビナデ後口縁部ヨコナデ。	完存。厚手。
4	床面直上	土師器　小型坩	(7. 7)	3. 8	8. 7	白・黒・橙色粒、水晶	良好	灰黄褐色	外面口縁部ヨコナデ及びユビナデ、肩部縦位ヘラケズリ、中位ヘラケズリ後ユビナデ、下半横ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ及びユビナデ、以下ヘラナデ及びユビナデ。	口縁2/3及び 体部一部欠損。 内面頸部絞り痕。
5	床面直上	土師器　小型坩	11. 7	5. 3	9. 9	白・黒・橙色粒、黒雲母	やや軟質	灰黄褐色	外面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ及びユビナデ。底部ヘラナデ。内面口縁部ヘラナデ後（指）ヨコナデ、肩部ユビオサエ、以下ヘラナデ。	口縁部一部欠損。
6	床面直上	土師器　小型甕	(11. 9)	–	(7. 7)	白・灰・黒色粒、黒雲母	良好	赤褐色	外面口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ及びユビナデ。 内面口縁部ヨコナデ、肩部ユビオサエ、以下ヘラナデ及びユビナデ。	口縁～体部片残存。
7	床面直上	土師器　小型甕	–	5. 3	(7. 0)	白・黒色粒、黒雲母	やや軟質	赤褐色	外面ユビナデ及びユビオサエ。底部ヘラナデ。 内面ヘラナデ。	体部中位～底部残存。
8	床面直上	土師器　高杯	18. 3	–	(14. 9)	白・黒・橙色粒	良好	橙色	外面坏部口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ後ユビナデ。脚部縦位ヘラケズリ後ユビナデ。内面坏部口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ。脚部ヘラナデ後ユビナデ。裾部ハケナデ。	坏部2/5及び 脚裾部欠損。 裾部内面剥落。
9	床面直上	土師器　甕	17. 8	–	7. 8	白・黒・橙色粒、水晶、黒雲母	良好	灰黄褐色	外面口縁部ハケナデ後ヨコナデ、以下ハケナデ。 内面口縁部ハケナデ後ヨコナデ、以下ヘラナデ後ユビナデ	口縁～肩部片残存。
10	床面直上	土師器　甕	18. 3	–	(12. 5)	白・黒・赤色粒 黒雲母	良好	灰黄褐色	外面口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ。	口縁～胴部中位残存。

H-7

番号	出土位置	種別、器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	床面直上	土師器　坏	(13. 6)	–	3. 3	白・黒色粒、黒雲母	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ及びユビナデ。	2/5残存。
2	覆土	土師器　甕	(24. 0)	–	(6. 7)	灰・黒色粒、黒雲母	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ。	口縁部片残存。

H-8

番号	出土位置	種別、器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土師器　坏	(12. 6)	–	3. 15	黒色粒、黒雲母	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、以下ヘラナデ及びユビナデ。	2/5残存。

D-1

番号	出土位置	種別、器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
1	覆土	土師器　小型甕	10. 5	4. 3	7. 2	白・黒・赤色粒、黒雲母、石英	良好	橙色	外面口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ後ユビナデ。底部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ、肩部ユビナデ、以下ヘラケズリ。	4/5残存。
2	覆土	土師器　甕	(16. 8)	–	(19. 9)	白・黒粒、黒雲母	良好	黒褐色	外面口縁部ヨコナデ、肩部横位ヘラケズリ、以下斜位ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナデ及びヘラナデ、以下ヘラナデ。	口縁～胴下部1/2残存。

番号	出土位置	種別、器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石質	色調	重さ（g）	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況、備考
3	覆土	砥石	16. 7	6. 2	5. 4	ホルンフェルス	–	621. 7	全面研磨。側面上端部にわずかな鏑。下面放射状研磨。	ほぼ完存。表裏両側面磨耗。 表面及び左側面の研磨痕が顕著。 右側面及び裏面は節離面。

Ⅵ　まとめ

今回の調査の結果、古墳時代前・中期、奈良時代、中世以降に帰属する遺構が確認された。ここでは確認された遺構・遺物を検討し若干の考察を加え、まとめとしたい。

古墳時代前期

確認された古墳時代の住居跡は本遺跡の遺構の主体を占める。その内、４世紀代と考えられる住居跡はＨ－２である。Ｈ－２出土の甕（１）は赤井戸式土器系統のものと考えられ、口縁部に輪積み痕状に段を有し頸部下位を縄文施文では無く縦位に刷毛目調整が施されている。他の土器（２～５）は概ね古墳時代前期にみられる小型甕（２）器台（３）､坩（４）、壷（５）の器種構成を示している。

周辺地域での古墳時代前期の竪穴住居跡の分布は希薄であり今井白山遺跡で１軒のみである。本遺跡から北東方向にある荒砥地域では発掘調査の事例も多く、弥生時代から連綿と続く遺跡が多く存在し集落跡も点在している。女屋宮田遺跡周辺の古墳時代前期の様相は広瀬川低地帯内での発掘調査事例の少なさも影響しているが、立地環境の点からも集落が少ない地域であり、主に赤城山南麓地域で確認される赤井戸式土器系の土器を有することから荒砥地区から続く集落の周縁部と考えられる。

古墳時代中期

本遺跡での５世紀代の住居跡はＨ－３・４・６である。Ｈ－３については出土遺物少量であり判断し難いが、小片の土器を観察するに当該期と考えられる。Ｈ－４・６は当遺跡で数多く遺物が出土した遺構である。Ｈ－４出土遺物は坏、高坏、甕を主体する器種構成を示す。坏（１）は丸底化した体部と口縁部とを画す明確な稜線からやや外反気味に口縁部へと立ち上がる。全体的に肉厚に感じられる。高坏（３）は坏部口縁に向かって緩やかに内湾しながら立ち上がり、内面に篦磨きが施される。脚部は裾部でハの字状に開き、外面には磨き、内面には輪積みの痕跡が残る。甕（４～６）は口縁部の屈曲が弱く、胴部に最大径をもち長胴化の傾向にある。外面は篦削り、内面は篦撫でを施す。Ｈ－６出土遺物は坏、小型の坩･甕、高坏、甕を主体とする器種構成を示す。坏は体部が彎曲し口縁部で短く外反するもの（内斜口縁坏、1･2）と、彎曲気味の体部のもの（３）に分けられる。小型の坩（４・５）は胴部箱型状に呈し、平底である。高坏（８）は坏部外面に緩い稜をもち、脚部は裾部で屈折する。甕（９・10）は外反する口縁部と胴部中位に最大径をもつ膨らんだ状態を呈すると考えられる。両住居の特徴として長胴化した甕（Ｈ－４）、体部が彎曲し口縁部で短く外反する坏（Ｈ－６）が上げられる。Ｈ－４の甕に関しては５世紀代に見られる短胴で胴中位に最大径をもつ砲弾形の甕からの系譜を引くものであり、長胴化へと変化する後出的な要因を考えれば５世紀第４四半期に位置づけられる。Ｈ－６は丸底化した坏、胴中位に最大径をもち口縁部の屈曲が明確な甕等を考慮するとＨ－４よりは古段階の５世紀第３四半期に位置づけられる。Ｄ－１からは小型甕（１）、甕（２）、砥石（３）が出土した。小型鉢に関してはＨ－６出土のものと同形態を示し、甕は口縁部に段を有し胴部が球状に膨らむといった概ね５世紀代の様相を呈している。砥石は研磨痕が顕著に見られるためかなり使い込まれたものである。

古墳時代中期になると女屋宮田遺跡周辺でも集落が増加し始める。これは広瀬川低地帯周辺の微高地上に集落を形成していた人々が低地内の微高地にまで集落域を拡げ水田等の生産域拡大を図ったためと考えられる。

奈良時代

確認された奈良時代の住居跡は２軒であり、調査区南側に隣り合う形で検出された。共に東壁に竈を持つ。大部分をＷ－４・５とカクランによって失われており、また壁高も低い為出土遺物は非常に少ない。その遺物中から図示し得たものをみると坏（Ｈ７－１、Ｈ８－１）は口縁部が短く直立し丸底からやや平底気味に、甕（Ｈ７－２）は頸部から胴部へ向かってやや膨らむ形態を示すため、８世紀代に帰属すると考えられる。両住居跡は重複関係にあるが検討するには出土遺物が少ないためここでは同じ８世紀代の住居跡とした。

平安時代

本遺跡では当概期の遺構は確認されていないが、周辺遺跡をみると奈良時代から続く集落跡が確認されている為、本遺跡直近の場所でも遺構が存在すると考えられる。

中世以降

中世以降の遺構としてはＷ－１～５とＰ－１～５が上げられる。Ｗ－１～５に関しては覆土・東西に延伸する等の共通点がありほぼ同時期のものと考えられる。Ｗ－３からは焙烙の小片が出土したが図示し得なかった。

今回の調査で古墳時代から中世以降に至るまでの遺構が多数確認された。古墳時代前期の住居跡は周辺地域では希薄であり、今回の発見で旧利根川氾濫原の微高地である女屋地域で当時の人間が生活を営んでいたことが証明された。確認された遺構のほとんどは調査区外へと続く。現在の桃ノ木川流路に近い調査区南側で住居跡が確認できたことは現在と当時の河川流路にズレが生じていることが窺える。旧利根川氾濫原の河川流路と集落域の拡がりを念頭において今後は調査すべきであろう。広瀬川低地帯内は大規模開発が少なく発掘調査事例も他地域と比べ多くない。近年増えつつある発掘調査事例と今後の調査・研究によって広瀬川低地帯内での遺跡分布・集落の動向が解明されることを願いたい。

参考文献

飯島義雄　『今井白山遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1993
坂口　一　『今井道上市遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
坂口　一　『笂井八日市遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
坂口　一　『今井道上市遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1994
坂口　一　『野中天神遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1996
武部喜充　『宮田遺跡』　宮田遺跡調査会　1996
奥村雅之　『石関西簗瀬遺跡・西片貝源田島遺跡』　石関西簗瀬遺跡調査会　1996
大西雅広　『笂井中屋敷遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997
神谷佳明　『下芝五反田遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1998
根岸　仁　『石関西田Ⅱ遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002
小島敦子　『荒砥前田Ⅱ遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2009
坂口　一　「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』４
　　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1987
坂口　一　「群馬県における古墳時代中期の土器の様相　―荒砥北三木堂遺跡の出土土器を中心として－」
　　『東国土器研究』５　東国土器研究会　1999
『木瀬村誌』　木瀬村誌編纂委員会　1995

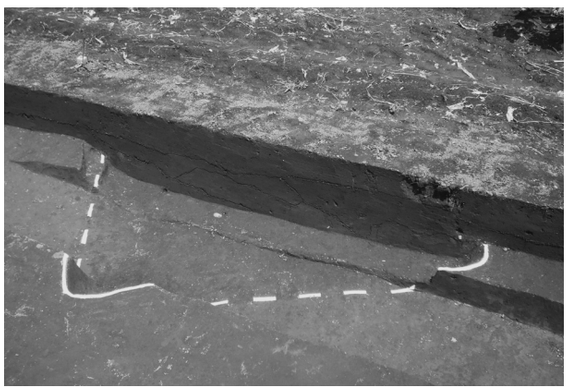
北側調査区全景（下が南）

南側調査区全景（下が南）

PL. 2

H－１全景（南東から）

H－１、W－１全景（西から）



H－３全景（西から）

H－４全景（東から）

H－４遺物出土状況（南から）

H－４遺物出土状況（南から）

H－４遺物出土状況（北から）

H－５全景（西から）

H－６全景（西から）

H－６カマド全景（西から）

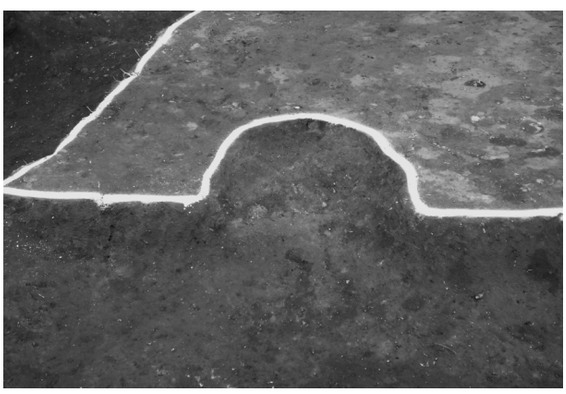
H－６遺物出土状況（南から）

H－６遺物出土状況（南から）

H－６遺物出土状況（南から）

H－６遺物出土状況（北から）

H－７全景（西から）

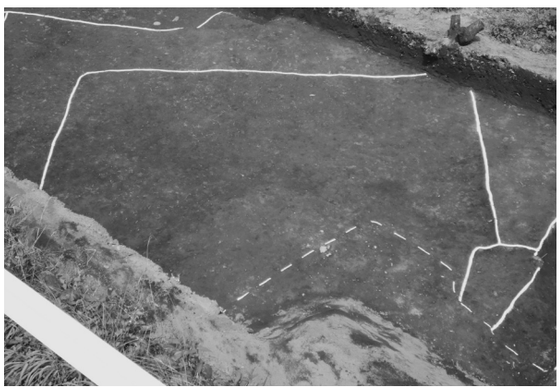


H－７カマド全景（西から）

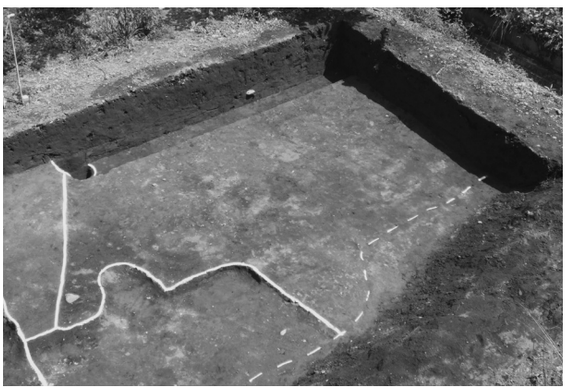
PL. 4

H－８全景（西から）

H－８カマド全景（西から）



H－９全景（南西から）

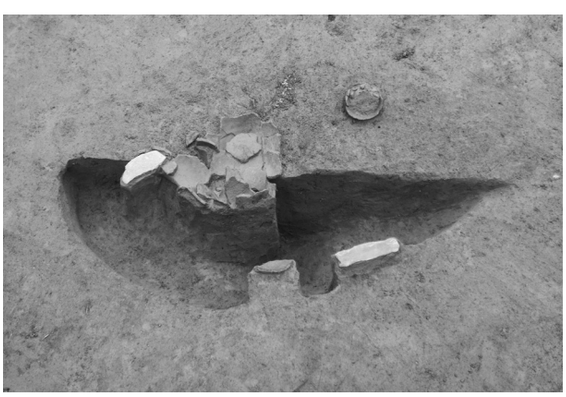


H－10全景（北西から）

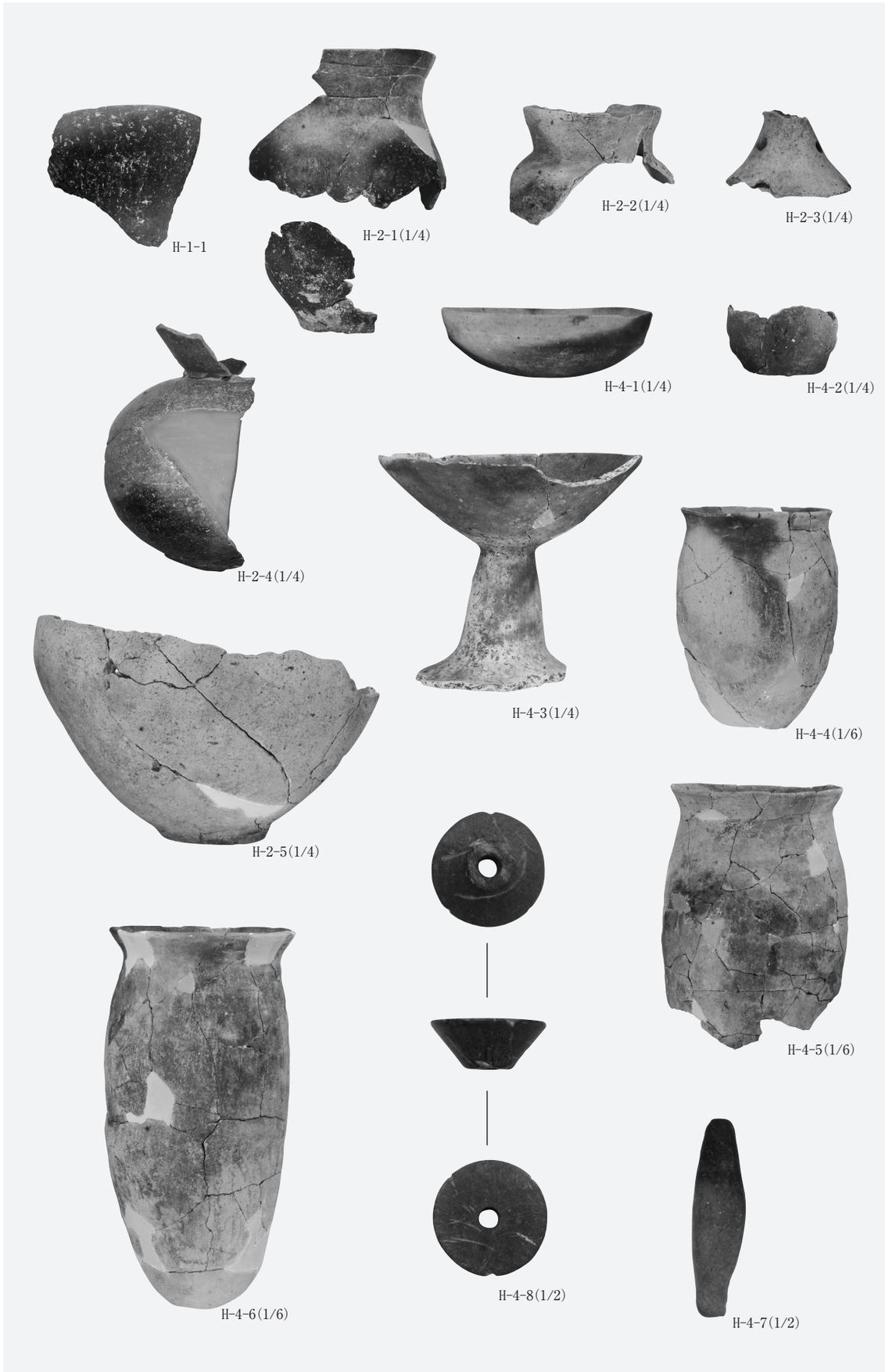
W－２（西から）

W－３全景（西から）

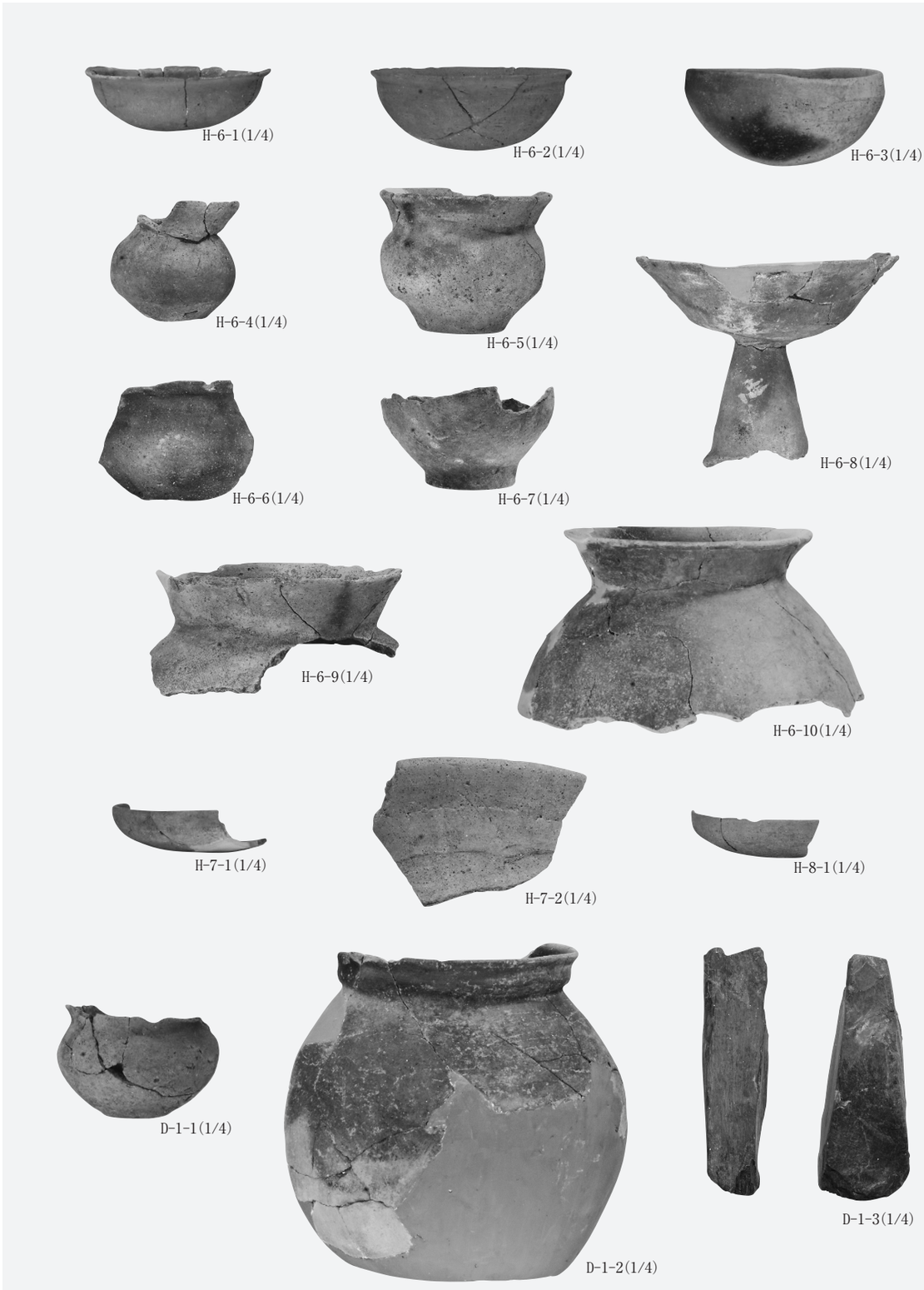
W－４・５全景（西から）



D－１遺物出土状況（北から）


H-1-1
H-2-1(1/4)
H-2-2(1/4)
H-2-3(1/4)
H-4-1(1/4)
H-4-2(1/4)
H-2-4(1/4)
H-4-3(1/4)
H-4-4(1/6)
H-2-5(1/4)
H-4-5(1/6)
H-4-6(1/6)
H-4-8(1/2)
H-4-7(1/2)

PL. 6


H-6-1(1/4)
H-6-2(1/4)
H-6-3(1/4)
H-6-4(1/4)
H-6-5(1/4)
H-6-8(1/4)
H-6-6(1/4)
H-6-7(1/4)
H-6-9(1/4)
H-6-10(1/4)
H-7-1(1/4)
H-7-2(1/4)
H-8-1(1/4)
D-1-1(1/4)
D-1-2(1/4)
D-1-3(1/4)

発 掘 調 査 抄 録

フ リ ガ ナ	オナヤミヤタイセキ
書 名	女屋宮田遺跡
副 書 名	まちづくり交付金事業（市道00-081号線道路改良工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編 著 者 名	神宮 聡・佐野 良平
編 集 機 関	技研測量設計株式会社
発 行 機 関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
発行機関所在地	前橋市三俣町二丁目10-２
発 行 年 月 日	西暦2010年１月29日

フリガナ	フ リ ガ ナ	コ ー ド		位 置		調査機関	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
オナヤミヤタイセキ 女屋宮田遺跡	マエバシシオナヤマチ 前橋市女屋町40-４ほか	10201	21F9	36° 22’ 5	139° 7’ 57	20090724 ～ 20090818	340㎡	まちづくり 交付金事業 （市道00-081号線 道路改良工事）

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
女屋宮田遺跡	集落跡	古墳～奈良時代 中世	竪穴住居跡 10軒 土坑 １基 溝 ５条 ピット ５基	土師器、石製品 土師器、石製品	

女 屋 宮 田 遺 跡

まちづくり交付金事業（市道00-081号線道路改良工事）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010年１月22日 印刷
2010年１月29日 発行

発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市三俣町２丁目10-２
TEL 027-231-9531

編集 技研測量設計株式会社

印刷 朝日印刷工業株式会社